

＝庄内地域4つの高等教育・研究機関が連携＝ 知の拠点庄内 シンポジウム **オンラインで開催**



庄内の未来を考えようとオンライン開催された「知の拠点庄内」シンポジウム

これからの社会・教育・環境提言

次代を担う庄内地域の中高校生視聴

庄内地域にある4つの高等教育・研究機関が連携して地域づくりを考える「知の拠点庄内」シンポジウムが12日、完全オンライン形式で開かれた。「ライフ×サイエンス2030庄内ビジョン」科学の力、知の力で変えていく、これからの社会、教育、環境をテーマに、各機関の若手研究者らが研究内容とともに地域の今後の在り方について発表・提言し、次世代を担う庄内地域の中高校生たちがオンラインで配信を視聴した。

慶應義塾天先端生命科学 高3年・菅原さくらさんは「海洋微生物で変える世界の未来―プラスチック汚染ゼロの庄内へ」と題して発表した。菅原さんは、中学時代に日本青年会議所「グローバルユース国連大使」で派遣されたカンボジアでの体験から環境問題に関心を深めた経緯を紹介し、「将来は何かの形で地元に戻りたい。研究を応用して庄内でバイオベンチャーを立ち上げたい」と発表。また、SDGs（国連の持続可能な開発目標）に関して「自分には関係がないと思っている若い人が多い。当事者意識を持って自分たちの住む街から少しずつアクションを起こすことが大事。一人一人の意識を変えたいため、日本の教育から変える必要があるのでは」と提言した。

このほか、各機関教員では鶴岡高専の松橋将太さんが「ラフビーを通じた地域児童の育成と題して発表したほか、山形大農学部の上野理絵さんが地域外の人々との協働による地域資源を活用した中山間地域の持続性を保つ取り組み、東北公益文科大の具尚浩さんが「海ごみゼロの庄内」に向けた多様な主体による活動などを発表した。

今回のシンポジウムは、30年がSDGsの達成目標年になっていることから、地域の未来を一緒に考える機会として、庄内地域の全ての中学・高校に開催案内チラシを配布するなど、若い世代に参加を呼び掛けて開催した。当日は中学・高校生を中心に約100人がオンラインで参加し、中学生からは「菅原さんのように海外に派遣されたい。ど